

国語

(一般選考)

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

携帯電話が私たちの生活に急速に入り込んだのは、一九九〇年代の後半以降である。一九九〇年代後半は、日本社会の個人化が進み、友人のあり方が変わった時期と重なっている。

個人化が進み、固有の人とつきあう必要性が薄れたことで、私たちは、つながりの輪に入るために、自ら動き、^①つながりを自足しなければならなくなつた。人びとは意中の人との関係を保つために、つながりに大量の感情を注ぐようになった。

おたがいの気遣いと感情で成り立つ関係は、どちらかの感情が冷めれば、つながりそのものが消失してしまうもろさを抱えている。関係が **I** するなかで世に広まったのが、空間的に離れた場にいる人をつなぐツール、**A**、携帯電話である。

目の前にいない「友だち」を捕捉してくれる携帯電話は、不安定になった私たちのつながりの隙間をウめるように、またたく間に普及していった。現代社会は、端末を介して身の回りにいない友だちとつねにつながる「常時接続の時代」を迎えている。

「形から入る友人」関係の維持に **I** する人びとは、ケータイ、スマホの電池残量を気にしつつ、肌身離さずケータイ、スマホをもつよう心がける。個人化により誰かとつながらなくてもよい自由を手に入れた私たちは、その環境とは裏腹に「どこにいてもつながりに捕捉される社会」に身を投じるようになったのである。

自由をもてあまし、巨大なシステムに身を寄せる姿勢は、ドイツの哲学者、エーリッヒ・フロムの述べる「自由からの逃走」を思い起こさせる。フロムはナチスドイツを事例に、自由と孤独の狭間に揺れた人びとが、自由を捨て全体主義に傾斜したありようを描いている。

つながりにおける「自由からの逃走」の手段として機能している情報通信ツールは、^②逃走の経路を充実させることで爆発的な普及を遂げていった。情報通信ツールは、目の前にいない人とのつながりにまつわる欲求を次々にかなえながら普及していったのである。そのカテイで、人びとのコミュニケーション

ンのなかのグレーな領域はなくなっていった。

コミュニケーションについて、今一度考えると、基本的にはグレーな領域の多い曖昧なものだということに気づく。いつ、誰から連絡をもらい、どういったことを話したかなどは、大事な話でないかぎり、よほど記憶力のよい人、あるいは記録熱心な人以外は忘れてしまう。

コミュニケーションにおける曖昧さのジヨキヨは、「形から入る友人」関係においてことのほか重要な意味合いをもつ。曖昧さがそのままつながりへの不安を喚起する材料になるからだ。

おたがい「友だちである」という感覚を更新し続けることで維持される「形から入る友人」関係は、感覚に依拠するゆえ、本質的に曖昧さを抱える。人の感覚や感情は目に見えるものではないので、感覚に依拠する関係は、当事者どうしが「ある」と思えば存在し、「ない」と思えばなくなってしまう非常に曖昧かつ不安定なつながりなのである。

人間関係が **II** するなか、人びとは、出会った相手と友人、恋人といった関係にならなければ、つながりの輪から取り残されるリスクを背負っている。その一方、友人や恋人は感覚に依拠するため曖昧さをともなう。

情報通信ツールは、人間関係が流動化し、おたがいが「友だち」であることを求められるなか、曖昧にされてきたつながりの中身を、非常にわかりやすい形で可視化させた。この機能は、私たちが情報通信ツールにますますしぼりつけるはたらきをもつ。そうして可視化されたコミュニケーションは、記録、承認、交友範囲の観点から、必然的に友人関係についても変質をもたらすことになる。

情報通信ツールが普及した社会では、人びとはそれぞれに個人を識別する番号(携帯番号など)やID(LINE IDなど)をもっている。番号やIDと個人が紐付けられることで、私たちは、「意中の人」に直接アクセスできるようになった。このような条件のもと、かなり早い段階で可視化されたのが、コミュニケーションの記録である。

携帯電話は普及しだした当初から、個々人の番号やIDを名前に紐付けて登録し、発信履歴、着信履歴という形で、私たちがいつ誰にアクセスし、いつ誰からアクセスされたか記録する機能をもっていた。この機能があることで、距離の離れた相手とのコミュニケーションの行き違いはかなり減少した。

コミュニケーションの記録は、連絡の交通整理だけでなく、承認の目安としても機能した。たとえば、AさんがBさんに電話をし、Bさんが電話に出なかった状況を想定してみよう。

携帯電話は、発信した側、着信した側双方に、「履歴」という形で何月何日何時何分に何回電話した(電話を受けた)という記録を残している。この機能を使えば、AさんはBさんが着信を受けてからどのくらいの時間で返信をしてくるのか正確に知ることができる。

この時間が長くなると、AさんはBさんから受け入れられていないのではないかと疑いを抱くかもしれない。Bさんには、「連絡をもらったのだから返信しなくては」という拘束力が発生する。

ここでもかりにBさんが返信をせず、電話に出ることもせず、Aさんが複数回電話をかけたならば、Aさんは非常に明快な形で、Bさんから拒絶されている

ることを認識する。コミュニケーションの記録は、私たちが「友だちと想定している他者」から連絡を得られたかイナカ明示することで、二人のつながりの深度を視覚的に明らかにしてしまうのである。

コミュニケーションの記録は、より大きな社会からの受容の目安にもなる。私たちは、自らのスマホを見返せば、一定の期日に、何人の人から何回の連絡があったのか、知ることができる。裏返すと、どれほど連絡がなかったのかも知ることができるのである。

二〇二一年一二月に大阪・北新地の雑居ビルで放火殺人事件が発生した。多くの犠牲者とともに死亡した容疑者のスマホに登録されていた電話番号は0件であった。「死ぬときくらい注目されたい」と検索して犯行におよんだ容疑者の孤立状況が推察される。

「どこにいてもつながりに捕捉される社会」で、誰からも捕捉されない状況は、私たちに誰からも見向きもされていないという感覚を呼び起こさせるのである。

いしだみつりの
(石田光規『「友だち」から自由になる』による)

問一 — 線部 a～j のカタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分は読みをひらがなで書きなさい。

問二 A と B に入る接続詞として適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゆえに

イ ましてや

ウ すなわち

エ もしくは

オ なぜなら

問三 I と II に入る語句として適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 固定化

イ 非日常化

ウ 流動化

エ 不安定化

オ 可視化

問四 — 線部①「つながりを自足しなければならなくなった」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 固有の人とのつながりが充実してきたため、それだけで満足しなくなりましたということ。
- イ 人間関係が広がり続ける中で、それらを自分で整理する努力が求められるようになったということ。
- ウ 固有の人とのつながりに飽き足らず、自分の期待に添う人を求め続けるようになったということ。
- エ 固有の人との関係性が薄れる中で、他者との関係を自分で築かなければならなくなったということ。

問五 — 線部②「逃走の経路を充実させる」とあるが、情報通信ツールが「逃走の経路を充実させる」とはどういうことですか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 他者とつながらなくてもよい自由を捨てた個人に対し、他者とつながれる手段を提供すること。
- イ 情報通信ツールの特性を生かして、コミュニケーションのグレーな領域の拡大を実現すること。
- ウ 巨大なシステムに適合できるように、個人が他者とのつながりを拒絶する活動を支援すること。
- エ 意中の他者とのつながりが個人化するように、コミュニケーションの曖昧さを保持すること。

問六 — 線部③「可視化されたコミュニケーション」とはどういうことですか。「記録」という語句を使って、簡潔に説明しなさい。

問七 — 線部④「友人関係についても変質をもたらす」とあるが、情報通信ツールは友人関係にどのような変質をもたらしたのですか。情報通信ツールが友人関係にもたらした変質について、「記録」、「承認」、「交友範囲」のいずれかの観点から簡潔に説明しなさい。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

江ノ電から見える海は、暗い色をしていた。砂浜との境界線が分からない。シーズンオフのせいか、サーファアの姿がちらほら見えるだけでカンサンとした印象だ。夕闇がもうすぐそこまで迫っていた。

七里ヶ浜でダイアナは下車した。ここに降り立った十二歳の冬からもう六年近くが経っている。電車を降りるなり、潮の香りが強くまとわりつき、途端に髪が重くなったように感じる。びくつと体の芯が震えるような肌寒さに、秋の深まりを感じる。山に向かつて住宅地を突き進み、大きな木造住宅の前でダイアナは立ち止まる。よく手入れされた庭には小さな池があり、鯉が泳いでいた。垣根に挟まれた門の上の「矢島学習塾」という看板もあの頃と少しも変わっていない。あらかじめ電話で連絡し、到着時刻と用件は伝えてあった。

呼び鈴を鳴らしてしばらくすると、引き戸が開き、ひつつめ髪の女の人が姿を現した。困惑した顔が次第に近づいてくる。祖母の姿をダイアナはまじまじと見つめる。本に出てくる「おばあちゃん」とは、白髪に老眼鏡、ふんわりしたショールを肩に纏っているものと決まっているが、この人は小柄ながら引き締まった体型で、髪の毛も黒々としている。おばさんと呼んだ方がずっとふさわしい。ティアラが今年三十四歳なので、五十代でもおかしくないのだから当然かもしれない。紺色のニットとくるぶしの見えるパンツはどことなく少年っぽい。縁なし眼鏡の奥の目はいかにも鋭く、どこをどう見てもティアラには全く似ていないが、母親以外の血縁者に出会えた喜びと緊張に足が震えた。

「あの、はじめまして……。ダイアナです」

祖母はこちらまで来ると、ダイアナの髪にそっと手を伸ばした。ほうじ茶と薄荷の匂いがする。どことなく、彩子ちゃんのお母さんと共通する雰囲気を持つ人だと思った。ダイアナは上手く付き合えるような淡い予感を抱く。

「ダイアナ……？ どんな字を書くの？」

「大きい穴、です。競馬の大穴。世界で一番ラッキーな女の子になりますよという願いを込めて名付けたそうです」

祖母は、ああ、とうめき、ぐったりとうなだれた。なんだか、申し訳なくなつて、ダイアナは口ごもる。多少は予想していたこととはいえ、ここまで自分の存在がショックを与えるとは思わなかったのだ。こ

の場を立ち去ろうか、と考えたその時、やっと祖母が口を開いた。

「ちゃんと食べさせてもらってるの。こんなに痩せて……とにかく、暗いんだから中にお入りなさい」

祖母は腰を伸ばし、門の中へとダイアナを促した。ほつとして後続く。家に入ると、香ばしい木と煮干しの匂いがした。初めて嗅ぐのに、なんだか懐かしい。すべすべとした木の廊下を渡り、畳の広がる部屋に案内された。ぐるりと本棚に囲まれ、窓からは海が見える。部屋の片隅にはブチ猫が丸くなっていて、細い目でこちらを睨んでいた。仏壇に飾られた写真は祖父のものだろう。ティアラは父親の死を知っているのだろうか。それにしても、まるで向田ドラマのセットみたい――。家具も食器も驚くほど古い。よく使い込まれた風合いがある。すぐに捨てたり、簡単に買い替えたりしないのだろう。落ち着いて生活している人につきもの、ある種のユウカンス。それこそがダイアナの欲するものだった。この女性はきつとどんな感情も誤魔化さず、折り合いがつかなくても目を逸らしたりしないのだろう。出されたほうじ茶は熱く香ばしく、ダイアナはほのかに感動を覚え、なんとかこの場に受け入れられた思いが強くなる。金髪の自分はいかにも場違いで、アセリを感じた。「サザエさん」に出てくるような卓袱台を挟んで、祖母と向き合う。彼女はダイアナの金髪を見つめながら、独り言のようにつぶやいた。

「あの子の兄妹はみんなちゃんと育つたのにねえ。中学に入るなり、あの子はもう家に寄りつかなくなったの。海のそばに家なんて建てるんじゃないわ……。海辺にはたくさん不良がいたからね。遊び相手には困らなかったのよ」

苦々しそうに語る祖母に言うべきか迷ったが、思い切って質問してみる。

「あの、その……、私のお父さんのこと、何かご存じですか？」

「知らないわ。十六の時に、あの子のお腹が大きくなったの。どうしても産みたい、反対するなら家を出るって言い張って。父親の素性は頑として言わなかったの。家を出てからは私やお父さんにも、一切連絡をよこさなくなつて……」

祖母は当時を思い出してか、暗い顔になった。予想していたとはいえ、失望は隠せない。が、落ち込

んでいる場合ではない。雰囲気を変えねば、とダイアナは部屋を見回す。

②「この家、本がたくさんあるんですね」

「あなた、本を読むの？」

少しほっとしたように、祖母は息を漏らす。思いきって、ここは積極的に振る舞おう、とダイアナは奮起する。『アルプスの少女ハイジ』は無邪気で元気な性格だったから、^①頑^{かた}なおじいさんの心をつかんだのだ。ことさらにハズんだ声でうなずく。

「将来は、本屋さんになりたいんです」

「まあ……。有香子も、昔はよく読んだんだけどあるときからはったり……」

上手く伝えられなくてもいいから、なんとか分かって貰おうと、言葉を探す。

「私、母がよくわからないんです。進路のことで、大喧嘩^{おおげんか}して家を飛び出しました。ゆうべは漫画喫茶に宿泊しました。私、高校に友達もいないし、訪ねていける場所なんてないんです。そしたら、ふつとこの家のこと、思い出して……。母以外の血縁者に会ってみたくなくなりました。そうじゃないと、この世界に母と自分しかいないみたいに感じちゃう。何も決められないし、どこにも行けない気がしちゃうって……。知らないうちに母みたいになっちゃうんじゃないかって……」

祖母は黙って、話を聞いてくれた。誰かの前でたくさんしゃべることなどないから緊張するけれど、かなり心が軽^{かろ}くなっている。^③勢^{いき}いに任せ、ずっと胸にしまっていた疑問をぶつけてみることにする。

「母は昔は山の上女学園に通ってたんですよ。こないにおうちでちゃんとした教育を受けていたのに、全部を捨てて一人で私を産んで……。どうしてそうしなきゃ、いけなかったんでしょうか」

「そうね。私にもよく分からない」

祖母はぼつりとつぶやいた。

「あの子がなんであんなったのか。私たちが何を間違えたのか。何が足りなくて、何が多すぎたのか。教育にはお金を才^いしまなかったの。欲しいものは全部与えてやったつもり。でも、あの子はいつも家の外を見てた。海の方ばかり見てた……。そうだ。あの子が使っていた部屋、見てみる？」

ダイアナが恐る恐る^{うなず}頷くと、祖母は腰を上げ、

廊下に向かった。突き当たりの小さなドアを開ける。祖母の後に続きながら、後戻りしたい気分にも駆られていた。これ以上進んだら、もう何からも逃げられなくなる予感がした。祖母は部屋の灯^{あか}りを点^つけた。

女の子の部屋としては簡素な印象を受ける。小さな部屋にはベッドと勉強机、天井まで届く本棚があった。そこに並ぶ本を見て、ダイアナは自然と頬がほころぶ。『大きな森の小さな家』『怪人二十面相』『ナルニア国物語』『メアリー・ポピンズ』シリーズはすべて揃^{そろ}っていた。アガサ・クリステイー、氷室冴子^{ひむろさえこ}、三島由紀夫^{みしまゆきお}、太宰治^{だざいおさむ}、デュマ……。ダイアナも好きな作家がずらりと並ぶ。十五歳とあって、蔵書にも大人と子供が入り交じっているような印象を受けた。そんな中でひととき目に付いたのは、向^{むこう}田^だ邦子^{くにこ}『父の詫^わび状』だった。

波の音が突然、くつきりと耳に届いた。

ティアラも自分と同じ年頃には、向田邦子さんに憧れて自分だけのお城を持ちたい、スタイルを貫きたいと胸を熱くしたのだろうか。

読書好きの少女が、この部屋を捨て、家族と別れ、一人で生きる決意をするまでに一体どんな葛藤^{くわつう}があったのだろうか。自分との違いとは何なのか？ 共通点はあるのか？ ティアラの内側に何が起きているか、ダイアナはこれまで真剣に考えたことがなかった。

窓^{かたわら}から見える灰色の海をしばらく見つめた。海の傍^{かたわら}に居るとふとした瞬間、寂しくなる。母もまた、自分のように「ここではないどこか」を必死に夢見たことがあったのだろうか。恵まれた家に生まれたからといって、自分に与えられた環境に満足できるわけではないのかもしれない。

彩子ちゃんはどうかだろう、と急に思った。あの子もあの素敵な家が嫌になつたりするのだろうか。マナーモードにしてあったポケットの携帯電話の着信に気付く。ティアラからだ。恐る恐る取り出し、耳に当てる。氷河が溶けていくように、ダイアナの中でゆっくりと何かが大きく崩れ落ち、体のふちから泡を立ててあふれ出した。

(^{ゆずきあさこ} 柚木麻子『本屋さんのダイアナ』による)

問一 ― 線部 a く j のカタカナの部分は漢字に直し、漢字の部分は読みをひらがなで書きなさい。

問二 〰 線部 ① く ③ は、ここではどのような意味を表していますか。後のア く エ から、それぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

① 風合い

ア 世間に広まっているうわさ
ウ そのもの独特の上品な味わい

イ そのものの手触りや見た感じ
エ 世の中をよくないうわさ

② 折り合い

ア 互いに譲り合って解決すること
ウ ものごとくにけじめをつけること

イ 相手に改まって何かを頼むこと
エ 見通しを大まかに立てること

③ 場違い

ア その場にふさわしくないこと
ウ 他と規模がかけ離れていること

イ その場の思いつきにすぎないこと
エ いつもに比べ様子がおかしいこと

問三 〰 線部 ① 「頑なな」、② 「軽く」、③ 「勢い」の品詞は何ですか。次のア く エの中から、それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア 名詞

イ 形容詞

ウ 形容動詞

エ 副詞

問四 ――線部①「ダイアナ」、②「女の人」、③「ティアラ」はどのような関係にありますか。三人の関係について、簡潔に説明しなさい。

問五 ――線部①「困惑した顔」なのはどうしてだと考えられますか。その理由についての説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 会ったことのない人物からの電話での依頼だったため、どう言い返すのがいいか考えていたから。
- イ これから会う人物がどんな目的でこの家にくるのか分からず、どう接するべきか迷っていたから。
- ウ 会いたいという思いをいつも抱き続けていた人物を前にして、動揺する気持ちを抑えていたから。
- エ この人物と自分がどんな関係なのか思い出せず、そのことが相手に伝わることを恐れていたから。

問六 ――線部②「この家、本がたくさんあるんですね」という言葉は、この場面でどんな効果を生んでいますか。その効果についての説明として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア それまでの二人の間にあつた対立的な関係をさらに悪化させ、この訪問の本来の目的から大きく外れることになる結末に導いていく効果を生んでいる。
- イ それまでの二人の会話を発展させて緩やかな連帯感にすぎなかった関係を非常に強固なものにし、その後の感動的な結末を呼び込む効果を生んでいる。
- ウ それまでの話題から目をそらさせることで二人の間にあつた重苦しい空気を和らげ、その後の意外な気づきに自然につなげてゆく効果を生んでいる。
- エ それまでの話題に沿う会話を挿入することで、温かな思い出に浸っている二人の心情を強調し、予定されていた結末に向かわせる効果を生んでいる。

問七 ――線部③「氷河が溶けていくように、ダイアナの中でゆっくりと何かが大きく崩れ落ち、体のふちから泡を立ててあふれ出した」のはどうしてですか。その理由を簡潔に説明しなさい。

三 次の①～⑤までの空欄に、——線部の言葉がカッコの中の意味になるよう、漢字一字を入れて慣用的な表現を完成しなさい。

- ① 引退試合で勝利し、() 終の美を飾った。 [最後までやりとおして成果をあげること]
② 自分のチームの() 色が悪いと感じた。 [形勢が思わしくないということ]
③ あの人の頭脳は() を抜いている。 [多くの中でとびぬけてすぐれていること]
④ 温泉につかって() 気を養う。 [ことに備えて十分に休養すること]
⑤ この二つは似て() なるものである。 [一見似ているが実は違うものであること]

四 次の①～⑤の故事成語の意味として適切なものを、後のア～オからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 断腸の思い
② 虎の威を借る狐
③ 白眉
④ 朝三暮四
⑤ 火中の栗を拾う

- ア 人を冷ややかに見つめること。
イ 多くの中で最もすぐれているもの。
ウ 他人の利益のために危険をおかし、ひどい目にあうこと。
エ 結果が同じになることに気がつかないこと。
オ 有力者の権勢をかさに着ていばるつまらぬ者のこと。
カ 深く悲しいことのたとえ。

五 次の①～⑤までの語の対義語となるように、空欄に適切な漢字を一字入れなさい。

- ① 偶然 ↔ () 然
② 絶対 ↔ () 対
③ 華美 ↔ 質 ()
④ 慎重 ↔ 軽 ()
⑤ 露見 ↔ () 蔽

受験
番号

氏名

解答例

一	問一	f	a	問二	A	f	a
						あいまい	すきま
					ウ		
				問五	B	g	b
						除去	埋める
					ア		
					ア	問三	
						I	h
						エ	いきよ
						II	
						ウ	i
							d
						りれき	けいしや
						j	e
						否	過程

(例) 携帯電話でいつ誰にアクセス、誰からアクセスされたかというコミュニケーションが、発信履歴や着信履歴といった記録として見られるようになっていくこと。

(例) 情報通信ツールは、返信の早さや反応の有無が、互いのつながりがどれくらい深いものであるのかを視覚的に明らかにしてしまう。

二	問一	f	a	問二	①	イ	f	a
							焦り	閑散
					②	ア	g	b
							すじょう	はさまれた
					③	ア	h	c
							弾んだ	よびりん
					問三	①	i	d
							惜し	あわい
					②	ウ	j	e
							かつとう	勇敢
					③	イ		
							ア	

(例) ティアラはダイアナの母親、女の人はダイアナの祖母である。

(例) よく分からないと批判的であった母親に対する思いが、少女時代に読んだ本を見ることによって、もっと知らなければならないという思いに変化したから。

三	①	有
	②	旗
	③	群
	④	英
	⑤	非

四	①	カ
	②	オ
	③	イ
	④	エ
	⑤	ウ

五	①	必然
	②	相對
	③	質素
	④	輕率
	⑤	隱蔽